

新世紀のキャンパス

Campus of New Century

## 創価大学 中央教育棟 GLOBAL SQUARE

開学50周年に向け、グローバル化を中心に教育改革を加速させる創価大学。国公立大学と見紛うばかりの広大な敷地に、ひととき大きな存在感を放つのが「中央教育棟 GLOBAL SQUARE」。

エントランスを入ると3階分の吹き抜けで造られた贅沢な空間が。どのフロアもガラス窓が多く、光が多く入るエコな構造になっている。



2階「ラーニングcommons "SPACE"」内の様子。総合学習支援オフィスの池ヶ谷副部長は「うちの学生はオープンマインドで、知らない人や留学生とディスカッションするのは普通ですし、この棟が建ったことで、いたるところでそういう光景が見られるようになりました」と語る。



講演などで使用される地下1階「ディスカバリーホール」。

2013年9月に創価大学「中央教育棟 GLOBAL SQUARE」がオープンした。アクティブラーニング・PBLなど教育方式の多様化に対応するため、また学生同士のコミュニケーションを促進するための施設設備の拡充が主な目的である。

「学生の学びを中心コンセプトに据えたかった」と語る馬場善久学長からは、「教・職・学」という言葉が多く聞かれた。学とは学生のことであり、学生の意見を設計段階から取り入れるため、他校見学なども学生が同席し、自分達がどう学びたいのかを積極的に意見したという。学生第一という理念にのっとり、開学3年目から学生を入れた全学協議会が立ち上がり、事あるごとに学生の要望を聞き、大学側からは事前情報を早めに伝えるなど、相互コミュニケーションを40年重ねてきた歴史がある。学生にとっては民主主義や社会での合意形成のプロセスを学ぶ場にもなっている。「ただ建物を建てるのではなく、なぜ造るのかというプロセスが伝わることで、学生の使い方が変わります」と馬場学長。同様に卒業生の意見も幅広く取り入れている。中央教育棟は、そういった様々なオピニオンの集大成というわけだ。

建物はツインタワーで、西・中央・東棟それぞれ4階以上はほとんどが教室と研究室。可動式什器が多く、配置を変えることで様々な教育方式の可能性を模索できる。西棟2階には「ラーニング commons "SPACE"」があり、コミュニケーションエリアや自習スペースも多くとられているほか、ワールドランゲージセンター(WLC)という英語教育ゾーンでは日本語が禁止され、専門スタッフや留学生によるチットチャットクラブ、イベントなどが随時開催されている。東棟には留学生フロアや、女性専用「フラワーラウンジ」も備える。中央棟には4階にカフェラウンジ「GranCafe」と、地下1階に学生ラウンジ「プラット」があり、学生が憩う場が多く設けられている。



地下1階のコンビニエンスストアの横に広がる学生ラウンジ「プラット」。コンセントや椅子の数も多く自習する学生たちにぎわう。

教育面では、2012年に採択されたグローバル人材育成推進事業で掲げた人材育成プログラムとして、専門科目を英語で学ぶ経済学部の実験プログラムを先駆けとして、他学部でも展開している。経済学部ではTOEIC®で730点以上を獲得した学生が全体の3割と、教育成果が上がっているためだ。今年4月には国際教養学部も開設した。一方受け入れについては、「大学院含めて8000名の在籍のうち、現在3.5% (45カ国から約300名)の留学生比率を5%以上に上げていきたい」と意気込む。グローバル化の新たな拠点である中央教育棟で、これから展開されていく教育が楽しみだ。

(本誌 鹿島 梓)

2階「SPACE」では学生がそれぞれ思い思いの使い方をしている。円形の自習スペースはゼミで使う教員もいるという。



2階「SPACE」内イングリッシュフォーラムは日常的なコミュニケーションで英語力を上昇させ、異文化理解や興味を促進するという場。円卓を囲んで留学生と学生が活発に議論する。



女性専用の4階「フラワーラウンジ」。女子のみの静かな空間で学習に励む学生のほか、女子向けの雑誌なども置いてあり休憩スペースにもなっている。

4階「GranCafe」にはソファやおしゃれなチェアなどが置かれ、窓を開け放つことで風が通る開放的な設計。地元のカフェが入り、ケーキや飲み物を提供している。メニュー開発には女子学生の意見も多く取り入れたという。

